

# 1 年次教育プログラムにおける地域連携導入の試み

—生活デザイン演習 A でのさがみはら環境まつり参加報告—

花田 朋美 深石 圭子 石綱 史子 呉 起東  
小池 孝子 富田 弘美 澤田 雅彦 白井 篤

1 年次教育プログラムにおける地域連携導入の試みとして、1 年次前期の「生活デザイン演習 A」(必修科目)の授業に「さがみはら環境まつり」への参加を取り入れた事例の報告である。事後に実施した学生の自己評価アンケート調査の結果から、「さがみはら環境まつり」への参加の取り組みは、コミュニケーション力の向上、能動的行動力の醸成に寄与し、学内での人間関係の構築をもたらすものであった。教育プログラムとして、初年次教育の4つの目的「①大学という場の理解 ②大学の中での人間関係の構築 ③コミュニケーション力などの大学で学ぶための思考方法の修得 ④能動的で自律的・自立的な学習態度への転換」の達成に効果的であったと評価することができた。

キーワード：1 年次教育プログラム 地域連携 さがみはら環境まつり 能動的行動力  
コミュニケーション力

## 1. はじめに

大学の使命の一つとして、社会との積極的な関わりが求められ、多くの大学が地域連携活動に参画している。それらは、学生サークル等の自主的な活動から、高度化されたアクティブラーニング、PBL(課題解決型学習)としてカリキュラムに体系付けられた取り組みまで様々な水準で実施されている<sup>1)~10)</sup>。生活デザイン学科においても、2011年4月に制定した「東京家政学院大学地域連携ポリシー」のもと、2011年~2013年に大型商業施設との共同プロジェクトに取り組み、社会人基礎力評価による調査の結果、学生の「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」が身に付き、「実践力の獲得」が達成されたことが認められている<sup>11)</sup>。

生活デザイン学科のさがみはら環境まつりへの参画は、2016年度からのさがみはら環境まつり実行委員会と本学との連携により学生の自主参加

型のプロジェクトとして実施されてきた。2016年度は2、3、4年生計26名、2017年度は2、3年生計19名の学生が参加し、「持続可能な循環型社会を考える~私たちの生活を見直してみよう~」というテーマで「廃棄物を利用したものづくり教室の開催(①新聞紙を利用したお花のブローチづくり ②貝殻ストラップづくり ③野菜の切れ端を利用したスタンプでポストカードづくり)」、更には「衣服の3Rに関連した卒業制作作品の展示」や「ポリ乳酸繊維布の農作業着の展示」等を行った<sup>12)、13)</sup>。3回目となる2018年度はそれまでとは参加形式が異なり、学科内で3種類の取り組み形態を運営することとなった。それらは、(1)1年次前期の学科共通科目である「生活デザイン演習 A」(必修科目)履修者の参加、(2)2年生の「生活デザイン演習 C」(選択科目)での学生実行委員企画への自主参加、(3)4年生による3年次後期からの学生実行委員としての参加であった。

地域連携活動の重要性が高まる一方で、大学における初年次教育も普遍化し、多様性が求められるようになり<sup>14)</sup>、地域連携活動を1年次からの教育プログラムとして取り入れている事例が多数あり、一定の効果が報告されている<sup>3)、4)、8)、9)</sup>。

本報では、2018年度のさがみはら環境まつりの取り組みのうち、特に1年次前期の「生活デザイン演習A」の教育プログラムとして新たに導入した活動状況について報告する。

## 2. さがみはら環境まつりの概要

### 2-1 実行委員会組織について

さがみはら環境まつりは、2005年より開催され2018年度で第14回を迎える神奈川県相模原市の地域振興事業の一つである。主催は、近隣大学、青年会議所やNPO等の市民団体、市内の事業者、市教育委員会及び市環境政策課等行政から成る「さがみはら環境まつり実行委員会」であり、図1に示すように「地域で活動する市民、事業者、大学及び行政の協働により、市民等の環境に係る関心を高めるとともに環境学習を推進し、もって環境の保全及び創造に係る活動を促進する」ことを目的としている。

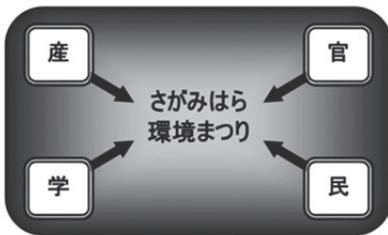


図1 さがみはら環境まつり活動イメージ

### 2-2 2018年度開催実績

2018年度において、実行委員会で設定した開催のねらいは、「楽しく学べるエンターテインメントとしてのまつり」「衣・食・住・遊びを通してエコライフの提案」「来場者、出展者、協賛者の交流の場」の3つであった。更に、2018年度実行委員会の新しい試みとして、学生実行委員制度を導入した。学生実行委員とは、学生の若い発想

力や活動力をさがみはら環境まつりの企画、運営に取り込もうとするものであり、本学から6名の4年生が参加し活躍した。当日は、以下の内容で開催され、子どもから大人まで市内外を問わず様々な人々が来場し、来場者数は2800人であった。

開催日：2018年6月24日（日）

10時30分～16時

会場：ユニコムプラザさがみはら

ポーノウォーク、ポーノ広場

参加費：無料

主な実施内容：

- (1) 環境保全団体による活動紹介  
パネル展示・工作等 出店数35ブース
- (2) さがみ風っ子ISO  
市立小中学校での自主的な環境活動の取り組み紹介  
・発表：1校（「谷口台小学校」）  
・展示：41校（小学校32校、中学校9校）
- (3) 講演会  
tvk お天気キャスター くぼてんきさん  
「みんなでエネルギーについて考えよう！」  
と題し、有限であるエネルギーとエコな暮らしについて紙芝居やクイズを実施した。
- (4) 環境ショータイム  
クワガタ忍者、高等学校生によるステージ発表
- (5) 水素エネルギー体験教室  
横浜国立大学、(株)ケミックス  
水素エネルギーについて、燃料電池を作る実験と講義を交えながら体験教室を実施した。更に、水素で走るミニロマンスカーや燃料電池自動車を展示し、水素エネルギーについての啓発普及を行った。
- (6) おだきゅう親子環境教室  
小田急電鉄とのコラボ  
おだきゅう親子環境教室及び相模大野車両基地の見学とまつり会場での水素エネルギーセミナーを実施した。更に、小田急電鉄による自社の環境をPRしたブース出展を行った。
- (7) スターバックスコーヒーによる取組み  
自社の取り組み紹介や環境に配慮されたコー

ヒーの提供を行った。

#### (8) 古着で作るモザイクアート

東京家政学院大学 学生実行委員企画

着用しなくなったTシャツを加工したモザイクアートを実施しリサイクルに関する普及啓発を行った。

#### (9) 大学の先生と楽しむ体験教室

教員及び東京家政学院大学1年生による不要品を使用したものづくり体験教室を実施した。

### 3. 「生活デザイン演習A」の教育プログラムとしての取り組み

「生活デザイン演習A」は生活デザイン学科の共通科目であり、生活デザインプロジェクトとして位置づけられ、1年次前期に開講される必修科目である。初年次教育を目的としており、2018年度の履修者は41名であった。

一般的に初年次教育の目的として挙げられる8つのうち<sup>15)</sup>、2018年度生活デザイン学科入学生への初年次教育における「生活デザイン演習A」での実施目的は、「①大学という場の理解 ②大学の中で人間関係の構築 ③コミュニケーション力などの大学で学ぶための思考方法の修得 ④能動的で自律的・自立的な学習態度への転換」の4つであった。「生活デザイン演習A」では、様々なワークを展開しその達成に努めた。そのプログラムの一部に、さがみはら環境まつりでの体験教室の開催を組み入れ、大学への所属意識の高揚と人間関係の構築を図るべく、学生同士の共同作業、及び地域の方々と協働する体験学習を実施した。

#### 3-1 大学の先生と楽しむ体験教室の実施

「大学の先生と楽しむ体験教室」は、リサイクルの普及啓発を目的として、担当教員が提案したテーマについて、学生が講師となり、参加者体験型の教室を実施するものであった。事前準備として4回、事後報告として2回を生活デザイン演習Aの授業において展開した。事前準備の第1回目にさがみはら環境まつりの内容説明とグループ分けを行った。履修者41名を8つのグループに分け、7つの体験教室と撮影班を編成した。第2回から第4回は、テーマ毎に分かれて、準備作業を行っ

た。以下に各テーマと概要を示した。

- (1) 来て・見て・触ってポーラスコンクリート  
環境配慮型コンクリートの一つである「ポーラスコンクリート」について、簡単な実験（空隙がどのくらいあるのか）と用途（植栽ポーラスコンクリートなど）の紹介（教員A担当）
- (2) 残り布でお好み色の花の髪飾り  
衣装制作の残り布を利用し、花型に切り取って、好きな色のストーンやビーズで装飾した髪飾りを制作（教員B担当）
- (3) 折ってたたんでペーパーボックス  
新聞紙やチラシの紙を折って、小さな紙の箱を制作（教員C担当）
- (4) お気に入りの洋服をリメイク☆アクセサリケース  
着られなくなった服と使い終わったQUOカードを使ってアクセサリケースを制作（教員D担当）
- (5) 葉っぱ de スタンプ  
身近な植物の葉や茎でスタンプを押して、オリジナルのカードを制作（教員E担当）
- (6) エコでキラキラまんげきょう  
牛乳パックやトイレットペーパーの芯等を使って万華鏡を制作（教員F担当）
- (7) 新聞紙をくるくるキュキュッとお花のブローチ  
新聞のカラー広告面を利用して花のブローチを制作（教員G担当）
- (8) 撮影班  
記録動画編集のため、学生の活動の様子を撮影（教員H担当）

終了後は、「さがみはら環境まつり活動報告会」を実施するため、事後1回目の授業では、グループ毎に活動報告用のパワーポイントを作成した。2回目の授業では、各グループ発表6分、質疑応答2分として、作成したパワーポイントを用いたプレゼンテーション発表による報告会を実施した。

## 3-2 学生の自己評価アンケート調査の結果

事後1回目の授業時間を利用して、学生の自己評価を促すこと、更には、学科の教育プログラムとして取り入れることへの評価情報を得ることを目的として、自己評価アンケート調査を実施した。調査項目は、①担当した仕事への積極性（かかわり方の程度）の評価 ②プロジェクトに参加した満足度 ③プロジェクトを実施する意義の理解である。アンケートは自由記名とし、履修者数41名に対し、38名の回答が得られ回収率は93%であった。択一方式の設問の回答項目は、a→5、b→4、c→3、d→2、e→1の数値に置き換え

て5点満点に対する評価点の平均値を算出した。

表1に担当した仕事への積極性（かかわり方の程度）に関する回答をまとめて示した。事前作業に対しては、20.5%の学生がかなり積極的に取り組めたと回答している。更に、当日の作業に関しては、42.1%の学生がかなり積極的に取り組めたと評価している。また、かかわり方の程度の自己評価結果は、70%以上の学生が、自分の持っている力の80%以上を投入したと感じている結果が得られている。

表2の準備時と当日の仕事への積極性に関する回答の評価点については、準備時3.85から当日

表1 担当した仕事への積極性に関する回答

設問	n=38	選択肢	人数(人)	割合(%)
Q. 担当したテーマの準備作業に積極的に取り組めたか		a: かなり積極的に取り組めた	8	20.5
		b: 積極的に取り組めた	18	46.2
		c: 取り組めた	11	29.0
		d: あまり取り組めなかった	1	2.6
		e: 取り組むことができなかった	0	0.0
Q. 当日の作業に積極的に取り組めたか		a: かなり積極的に取り組めた	16	42.1
		b: 積極的に取り組めた	12	31.6
		c: 取り組めた	9	23.7
		d: あまり取り組めなかった	1	2.6
		e: 取り組むことができなかった	0	0.0
Q. このプロジェクトに自分の持っている力のうちどの程度を投入したと感じているか		a: 95%以上	12	31.6
		b: 80%以上	15	39.5
		c: 60%以上	8	21.1
		d: 50%程度	3	7.9
		e: 40%以下	0	0.0

表2 準備時と当日の仕事への積極性に関する回答の評価点の比較

項目	n=38	準備時平均値	標準偏差	当日平均値	標準偏差
準備時と当日の仕事への積極性に関する回答の評価		3.85	0.78	4.13	0.87

4.13に上昇したと結論づけられる。

表3に担当した仕事への積極性の設問に対し、肯定的な評価であるa、b、cの回答をした学生の作業遂行時に努力した点、工夫した点についての記述式の回答結果を示した。回答は「担当した作業の質の向上や効率化」「子ども（参加者）に対する配慮」「自身の説明の工夫」の3種に分類でき、記載文章の内容から、よりよくコミュニケーションを取ろうとする努力や人に伝える工夫をするなど、多くの学生は、能動的に取り組んでいたものと考えられる。更に、表1及び表2に示した準備時より当日の評価点が高くなった要因は、多くの子ども（参加者）を前にして、学生ひとりひとり

が教える側として対応せざるをえない状況となり、考えていたことや準備してきたことを実行する場を得たことにより、積極的な行動ができたと感じた結果だと考えられる。

表4から表6にプロジェクトに参加した満足度の評価に関する結果を示した。表4に示す通り、94.8%の学生が参加して良かったと感じている結果となった。その理由についての記述式回答結果を表5にまとめて示した。主な回答は2つのカテゴリーに分類することができ、「他者とのコミュニケーションが取れたこと」と「非日常的な特別な体験をしたと評価していること」が、満足度が高い要因であったと考察できる。

表3 作業遂行時の努力点、工夫点等 (n=53)

項目	記載例	回答数
作業の効率化、質の向上	担当した作業がとても苦手で心配だったが練習した	19
	自分から手伝えることを探したり、行動することを心がけた	
	下準備を空き時間に進めた	
	積極的に意見を言った	
	グループのメンバーと話し合いながら進めた	
丁寧に作業をした		
子ども（参加者）に対する配慮	子どもたちが分かりやすいように言葉をかみくだいて簡潔に説明した	18
	どのようにすればたくさんの人が楽しめるか、喜んでくれるかを考えた	
	子どものペースに合わせて作り方を教えた	
	小さい子どもたちにはより丁寧に教えるよう努力した	
	参加者が達成感を感じられるよう作業を加減して進めた	
子どもと仲良く話せるよう質問を多くしたり、流行を聞いたり、子どもたちが話せる工夫をした		
説明の工夫	どのように説明したら理解してくれるか考えて最初に見本を見せるなどの工夫をした	16
	できるだけ分かり易く伝えるためにはどうすれば良いかを考えたり、当日は大変そうな所を手伝ってあげた	
	ゆっくりと説明することできちんと教えられると思い頑張った	
	環境まつりであることを念頭に置き、何を使っているかを伝えるようにした	

表4 参加満足度

設問	n=38	選択肢	人数 (人)	割合 (%)
Q. プロジェクトに参加してどう思ったか		a: とても良かった	18	47.4
		b: 良かった	18	47.4
		c: どちらとも言えない	2	5.3
		d: 良くなかった	0	0.0
		e: 参加しない方が良かった	0	0.0

表5 参加満足度の回答理由 (n=35)

項目	記載例	回答数
他者との交流	子どもたちとふれ合えて楽しかった	19
	クラスで新しい友達ができた	
	参加者との交流を図って自分から考えて動くことが少しできた	
特別な体験	普段ではできないような体験だった	16
	環境について考える機会が得られた	
	楽しみながら地域貢献ができた	
	楽しかった	

表6 プラスになったこと (n=28)

項目	記載例	回答数
コミュニケーション力の向上	幅広い方々と沢山のコミュニケーションをとることができた	20
	子どもとの接し方が少し分かった	
	人との接し方を学べた	
	話したことのなかったクラスメイトと仲良くなれた	
	人とコミュニケーションをとることが楽しかったと分かって良かった	
教えることの経験	子どもに何かを教える楽しさを知った	4
	子どもに分かりやすく教えるように考えたことが将来につながる	
	教えるのがうまいと初めて言われたのでプラスになった	
その他	積極的に行動してみようと思えた	2
	少しのトラブルにも焦らず行動できた	1
	ものを作る楽しさをより一層知ることができた	1

表6に示すように、プラスになったことの設問に対して、多くの学生は「コミュニケーション力の向上」を挙げている。また、「教えることの経験」を挙げる学生も複数名おり、良好なコミュニケーションが成立したことに基づく結果であると考えられる。少数回答では、「積極的に行動してみようと思えた。」や「少しのトラブルにも焦らず行動できた」という内面の成長を感じられる記述もあった。

表7にプロジェクトを実施する意義の理解について示した。81.6%の学生が理解できたと回答している中、どちらともいえないが13.2%、理解できなかったと回答したが学生が5.2%存在している。意義の理解の程度によって、取り組む姿勢が変化することから、これは教員側が反省すべき点あり、今後の導入方法の課題として検討する必要がある。

「生活デザイン演習A」(必修科目)の教育プログラムとして「さがみはら環境まつり」に取り組んだ結果、初年次教育の4つの実施目的「①大学という場の理解 ②大学の中での人間関係の構築 ③コミュニケーション力などの大学で学ぶための思考方法の修得 ④能動的で自律的・自立的な学習態度への転換」の達成に効果的であったと考えることができる。特に、本学の学生として、学外の方々と接した経験は、コミュニケーション力の向上、自律的・自立的な能動的行動力の醸成に大きく寄与し、担当教員を核とした学生同士の共同作業は、学内での人間関係を構築する方法として機能したと考えられる。従って、さがみはら環境まつりへの参加は、1年次教育プログラムとして有効な一つの方法であり、生活デザイン学科の特徴的な教育プログラムとして今後も取り組む価値があると評価できる。

表7 プロジェクトを実施する意義の理解の程度

設問	n=38	選択肢	人数 (人)	割合 (%)
Q. 実施する意義を理解できたと思うか		a: よく理解できた	9	23.7
		b: 理解できた	22	57.9
		c: どちらとも言えない	5	13.2
		d: あまり理解できなかった	1	2.6
		e: 全く理解できなかった	1	2.6

#### 4. おわりに

1年次教育プログラムにおける地域連携導入の試みとして、「生活デザイン演習 A」(必修科目)の授業に「さがみはら環境まつり」への参加を取り入れた結果、コミュニケーション力の向上、自立的・自立的な能動的行動力の醸成に大きく寄与し、学内での人間関係を構築する方法として機能した。このことから、教育プログラムとして、初年次教育の4つの実施目的「①大学という場の理解 ②大学の中で人間関係の構築 ③コミュニケーション力などの大学で学ぶための思考方法の修得 ④能動的で自立的・自立的な学習態度への転換」の達成に効果的であったと考えることができる。

最後に、アンケート調査において「Q 次回このようなプロジェクトを行う場合に改善した方がよいと思うことを記載して下さい。」との記述式の設問に対して、学生の回答の主な内容は、事前準備と事後のまとめの時間を増やすこと、担当グループの分け方について、当日のタイムスケジュールについて、ユニフォームについてなどであった。これらの声を参考にしながら生活デザイン学科の教育プログラムとしてより良いものに発展させていきたいと考えている。

#### 5. 謝辞

本学の教育プログラムにおける地域連携導入へのご理解とご協力を賜りました「さがみはら環境まつり実行委員会」の皆様へ感謝申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 大野建：地域連携教育の一試行 大学と地域の双方に成果がある「協働学習」に向けて、和歌山大学経

- 2) 内平隆之、中塚正也：大学生による地域連携活動の内的効果と評価の枠組み、農林業問題研究 52 (4), pp.211-216 (2016)
- 3) 高木邦子：「実践演習」の効果の検討 (2) 大学生の成長の自覚と「地域連携実践実習」の履修、静岡文化芸術大学研究紀要 18, pp.111-118 (2017)
- 4) 家本博一：全学部1年生へのPBL「まちづくり提言コンペ」の実践－地域学修を目的とする全学的なアクティブ・ラーニングへの第一歩として－、大学教育と情報 2016年度 No.2, pp.10-13 (2016)
- 5) 酒井麻衣子：“現代の志塾”多摩大学におけるプロジェクト型地域連携学習の進化と今後の展望、大学教育と情報 2016年度 No.2, pp.14-17 (2016)
- 6) 林靖人：地域・社会との「連繫」による課題解決実践型教育環境の構築を目指して「地〔知〕の拠点整備事業」および、連携研究員を活用した課題解決実践型授業の開発～信州大学～、大学教育と情報 2016年度 No.2, pp.18-21 (2016)
- 7) 岡野啓介：地域と連携したアクティブラーニングの推進とその効果の可視化をめざして、大学教育と情報 2016年度 No.3, pp.2-5 (2016)
- 8) 田坂逸朗：広島修道大学COC事業の取り組み～大学生を地域イノベーション人材に～、大学教育と情報 2016年度 No.3, pp.6-9 (2016)
- 9) 清水恵美子：茨城大学の地域志向教育と新しいPBLの取り組み、大学教育と情報 2016年度 No.3, pp.14-17 (2016)
- 10) 櫻井政成、赤澤清孝、滋野浩毅、久保友美、乾明紀：地域連携活動への参加が学生の意識に与える影響の分析に基づく効果的な大学・地域連携科目及び事業の開発に向けた研究 <http://www.consortium.or.jp/wpcontent/uploads/>

shitei03.pdf

- 11) 花田朋美、山岡義卓、白井篤：自主参加型の地域連携プロジェクトによる大学生の学習効果－社会人基礎力評価からの考察－、東京家政学院大学紀要 52, pp.159-169 (2012)
- 12) 花田朋美：「地域で学び、地域で育つ。」、東京家政学院大学地域連携事例集 2017、p.36
- 13) 花田朋美：「地域で学び、地域で育つ。」、東京家政学院大学地域連携事例集 2018、p.26
- 14) 山田礼子：大学の機能分化と初年次教育－新入生像をてがかりに、日本労働研究雑誌 629, pp.31-43 (2012)
- 15) Kawaijuku Report：大学の初年次教育調査、2010年9月、pp.25-35.  

---

(受付 2019.3.27 受理 2019.6.11)